

らなる。

本地域には北部及び南部の2カ所に変質帯が存在する。

北部変質帯は、花崗閃緑岩・斑岩類とその周辺の上部白亜系・下部第三系中にNW-SE方向をもって大規模に配列しているが、本調査で検証できたのは北側の部分である。本変質帯は、珪化、黒雲母化、セリサイト化、プロピライト化及びカオリン化からなる。ここでは既に一部で試錐探鉱と立坑調査が行われている。試錐着鉱部の確認のために深度約30m程掘削された立坑により厚さ12mの斑岩銅鉱床型二次富化帯が把握されたといわれる。立坑脇のダンプでは、緑色酸化銅鉱物・黄銅鉱を伴う粗粒黄鉄鉱、輝銅鉱・黄鉄鉱鉱染状鉱石及び白色粗粒結晶質の石英細脈片を認めた。立坑周辺は、石英、カオリン、褐鉄鉱及び赤鉄鉱からなる酸化・溶脱帯であるが、その中には電気石の鉱染・細脈及び石英細脈が残されている。この石英脈の流体包有物は、気液2相包有物で、包有物ごとに気液比が異なり熱水の沸騰を示唆するが、均質化温度は平均290.7℃、塩濃度は0.40 NaCl wt%であり浅熱水性鉱化作用型の値を示す。同溶脱帯のボックスワーク構造からは少量の銅硫化鉱物と多量の黄鉄鉱が初生的に存在したことが推定される。立坑の東側約500m間は試錐探鉱が実施されていない。立坑の南約100m以南には多くの試錐が実施されているが、着鉱の報告はない。また、立坑の北約500m以北はプロピライト帯となり、立坑の北西約1.2kmには鉱脈型のAg-Pb-Zn鉱床(Santa Rosa鉱山：非稼行)が存在する。立坑の南側地区は花崗閃緑岩中の珪化、セリサイト化及び電気石化を主体とし、褐鉄鉱化が著しいが、その東側のプロピライト帯(白亜系)には黒雲母化と緑色酸化銅鉱物の鉱染が認められる。

南部変質帯は、上部第三系・第四系中に貫入したデイサイト～斑岩ドーム及びその周辺部に分布する。本地区は地形的及び地質的にカルデラの可能性が考えられることから、上記ドームは後カルデラ貫入活動の産物と考えられる。本変質帯は、一部にセリサイト化を伴うものの、珪化、明礬石化、カオリン化等からなる酸性変質を主体とすることから、火山活動中心域で形成されたと考えられる。変質帯中には玉髄質～オパール質の珪酸鉱物と細粒黄鉄鉱・褐鉄鉱の鉱染が認められる。地表の表層部は黄鉄鉱の酸化に起因する二次的な明ばん石化・カオリン化により著しく白色化を呈している。

岩石地化学異常として注目されるのは、北部変質帯における局所的なZn-As-Hg高異常、及び南部変質帯におけるPb-Zn弱異常とAs-Hg高異常である。

2-8 カマローネス地域

カマローネス(Camarones)地域の地質図をFig. 2-2-36に、地質断面図をFig. 2-2-37に、模式地質柱状図をFig. 2-2-38に、鉱徴位置図をFig. 2-2-41に、変質鉱物分布図をFig. 2-1-42にそれぞれ示した。

(1) 地質鉱床概要